

昭和四十四年七月二十三日 第三回（毎月一回・便十五日發行）

（通第二〇一号）

続記念号

かたみの御文……………真実院大瀛……………(1)

目 数異抄第三章の味わい……………福島政雄……………(3)

次 人間のいとなみ……………池山寿夫……………(12)

一道会の記……………榑原徳草……………(22)

慈

光

第十八卷

第二号

かたみの御文

真実院大瀛

1760 (宝暦10)
1804 (文化3)

印存の
能化知洞
修持ノ
ノ

(註) 和上は広島県出身、西本願寺派の勸学職。同派内に三業販命さんごうきやうめいの異義がおこり、十年間の紛争になり血を流すまでの大惑乱の際、和上の真説に、異解者智洞の屈伏するにおよんでその解決にいたしました。宗門の大功労者であります、その問題の末期に病のため長逝されました。東京の築地本願寺の末寺で亡くなれましたが、菅瀬先生等の御尽力によって和上の墓を築地本願寺に移されました。この書簡は和上が宿病のため入寂せられた直前に母上に送られた貴重な かつみの御文であります。

○ 静かにおもん見れば、人間に生を感じる事は上々の因縁により、これ大なるよろこびなり。されども若し仏法に逢わずば枯木の春にあわざるが如し、よろこびの中のかなしみなり。

たまたま人間に生まれ、ことに仏法にあえる身は、よろこびの中よろこび何事かこれにしかむ。たまたま仏法

に逢うといえども、他宗の教は我等が身の上にはかたがたし。ここに真宗の教は、末代の罪ふかき五障三従の女人を本と助けたまわんと誓いたまいし弥陀の本願をすすめたまえば、ありがたしというもなおおろかなるものなり。

されば其の本願をたのみて、浄土にまいらんと思うについで、いかように心をもちて、たすかるべきぞなれば、何の様ななく、唯我身は、つみぶかきあさましき身ぞとおもいとりて、かかるあさましき身を本とたすけたまう弥陀如来の本願なれば、罪ふかき身ながら御たすけにあずかることよと信じ奉りて、少しもうたがう心なければ必ず御たすけにあずかるなり。このおもむきをしかと思ひ定めて、うたがいなきを、たのむとも、信ずるともいうなり。御文章に曰く、かの仁体じんたい(からだ)のこと。経論には同輩どうはいのことに用う)においてはやく御影前にひざまずいて、廻心懺悔の心をおこして本願の正意に帰入して

とあり、又曰く、この故に南無の二字は衆生の弥陀如来に向いたてまつりて、後生たすけたまえともうす心なるべし、とあり。

然れども弥陀をたのむとて、画像、木像にむかいてたのむにもあらず、口にたすけたまえというにもあらず、心のうちに御助け候えと凡夫の念をおこすにもあらず。南無阿弥陀仏は本願の御呼声なれば、たすけてやるぞと呼びたまえる、その御声をきいて、御たすけにあずかる事よと信じて、後生の一大事をば弥陀にまかせまいらせて

自力のはからいなきを、たのむとはいふなり。

此上は、よきもあしきも皆前生よりの約束業因のなすわざとあきらめて、必ず、神にいのり、仏にいのり、其外、日の善惡をえらび、方角の吉凶をとい、天を拝み星をまつり、占にかかるなど、いまわしき心あるべからず。又さきだてる親兄弟の法事をいとなみたまうとも、さきだてるものへ手向けまいらす心あらば、これみな自力なり。親兄弟の命日にあたりて法事をいとなみたまうときは、忌日、命日を縁として、仏に報謝のために御供養もうすと思いたまうべし。たとい仏壇の掃除をするとも、花をたつるとも香をたくとも、皆報恩とおもうべし。信の上は何事も報謝と思いたまうべし。我身だに仏にならば自由自在に済度なるべし、人のためとおほしめさずとも、

まず我身の信心さだまりぬるやいなやと思召して、自身の安心決定あるべきなり。いよ／＼往生うたがいなくおぼし召す上は、報恩の称名おこたりなく御たしなみ肝要なり。此上は御本山の掟、御公儀の御法度にそむかぬように心をかけて、御身をつゝし第一にしたまうべきなり。

併し、人によりて身のすぎわいについて偽りをいわねば身のたたぬ人もあるべし。其外腹もたち、欲もおこるは常のことなれば、止めてもやめられぬことは仕方なし。往生のためとは、やむるに及ばず、兎角あしき心のおこるときは、さて／＼浅ましきかな、かかるものも御たすけに預る事のありがたやと、かえつてこれを御縁とし、仏恩をよろこびたまうべきなり。身の行はあしくとも、心さまはあしくとも、称名は浮ばずとも、ありがたくおもう心はおこらずとも、これでは往生いかかと、うたがうべからず、この者をたすけんとありて、あつく御苦勞まします本願よと、安堵のおもいに住して御入り候え。我安心かくのごとし、これをかたみと思召して、あけくれ御覧候え。

母上さま

あなかしこ
大瀧

歎異抄第三章の味わい

福島政雄

少年勢至丸

今晩は歎異抄第三章の味わいということの問題といたしますが、それについて最初法然上人と親鸞聖人と、どんなにお二人が違っていらっしやるか、そういうことからお話をしたいと思ひます。

もう私が五十年前のことですが、東京大学の学生として村上専精先生の日本仏教史という御講義を聞いたのでありますが、その御講義のうちに、日本仏教史のうちに一番円満な人物は法然上人だ、ということを抑言った。それが私の記憶にしみこんでおりますのであります。そうすると法然上人のどういうところを抑言ったのであろうかということを考えておりました。

ところがここにありますのは勅修法然上人行状画図というのでありまして、これは法然上人伝のうちでは一番詳しいのだそうであります。この本を読みまして法然上人のことを色々知ることができたのでありますが、その中で、法然上人がまだ勢至丸という御名で、九つの時、仲々勇まし

い少年でいらしたことがこのお伝記で私に分りましたのであります。

これはよく御存じでありましようが、上人の父上が漆時国という人でありまして、何でも御先祖が京都で人殺しをやつて、京都に居られなくなつて美作の国—今の岡山県の東の方にあたりますが—そこに移され、それから何代か経つて後に法然上人がそこでお生れになったのであります。

山陽線と山陰線とを結ぶ線がいくつかありますが、今の誕生寺という停留所があります。これが法然上人の父君が住まつて居られましたところのその館の跡に建てられたお寺であります。ここで上人がお生れになったので誕生寺といひます。私も一度お詣りいたしました。が、上人がお生れになった時うぶ湯をつかつた、その井戸というのが今も残っておりますのであります。

その漆時国を恨む人というのが源内武者定明というので

あります。何を恨んだかと云いますと、時国は自分の先祖を誇りとして、定明がその地方で大事な役目をしていたのに、そこへも挨拶に行かなかった、威張っておられたというようなことで、定明の方ではどうも面白くないというので、或春の晩のようであり、夜討ちに行きまして、時国は出て戦ったけれども、突然夜襲をうけてどうにもこちらの方に備えが無かったからでありましょう深い手傷をうけて亡くなられたということであり、

ところで亡くなる時に勢至丸と呼ばれました。勢至丸は仲々勇ましい子供でありまして松明の光で、向うの方に立っている定明が見えると、子供が使う弓に矢をつがえて放つと定明の眉間に立って、深い傷ではないけれども血がだらだらと流れて目に入るので、定明は陣を退いたそうであり、時国の方は段々と深い手負いで亡くなるという時、勢至丸を呼んで

「自分は今定明のために夜討ちにあつてこのように死ぬのであるが、お前は決して親の仇を討とうなどと思つてくれるな。お前が親の仇だと云つてあの定明を殺したなら、定明の子供がまた親の仇だといつてお前を殺すということになるだろう。そういうことをしていったら人間というものはお互に仇同志で何時まで経っても殺し合いをせねばならなくなる。どうぞ自分のあとで親の仇討ち

をするというようにしてくるな。お前は仏門に入つて天晴れ立派な坊さんとなつて親の菩提をとむらうようになつてくれ」

というのがお父さんの大切な遺言であつたのであります。そのお父さんの遺言をまもつて十三歳の時に近所のお寺で出家得度して小僧さんとなつて弟子入りしたそうであり、和尙さんが教えて見ると非常に利潑な子供で、何でもすぐ覚えるという風でありましたから、これはこんな子を田舎においては惜しいことであるといつて、手紙を持たせて比叡山に行かせるのであります。

叡山で修行

比叡山の源光という方が、その手紙を受取つて読んで見るといふと「文殊菩薩の像を一つ差し上げます」と書いてありました。ハテナ、この小僧さんは何も仏像らしいものを持つていないようであるがと、フト目を見たら、何とも云えぬ利潑な目をしている。それから坊さんが「わかった、文殊菩薩の像というのはこの小僧さんのことだな」ということに気付きました、それからお弟子になつて、後の法然上人の修行が始まるのであります。

叡山の修行というものは仲々もともと難しいようでありまして、大部な、大きな法華経関係の書は勿論、法華経の註釈の本を読み、一方では四種三昧ししゆさんまいといつて、坐つても心

をしずめ、立つて歩いて心をしずめ、坐つても立つても何時でも心がしずまり、それからどんな仕事をやっていても心が常にしずまるといつたような三昧であります、法然上人は、その四種三昧をその通りにやられたでしょうか、のちには念仏三昧一つになつたのでありますから、上人は念仏三昧をやられたのかも知れません。

そうして十五歳から四十三歳まででありますから二十八年度、その間一切経を三遍か五遍くりかえしお読みになつた。然しその中で法然上人の心を本当にひらいたのは善導大師のお言葉「一心に専ら弥陀の名号を念じて、時節の久近を問はず、念じ念じて捨てざるを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に」のあのお言葉であります。あの善導大師のお言葉にハツと心がひらけ、専修念仏、ただ念仏一つをお称えになるようになられた。そのようにお心持がひらけ落着かれて、それからのちでありましょう。五十歳をお越えになった頃から村上先生の仰言つたように、日本仏教史上最も円満な人格というようにおなりになったものだろうと、私は考えるようになりましたものであります。

専修念仏の上人

その法然上人の専修念仏、念仏ただ一つと、それが今迄の仏教、釈尊からこのかたの従来の仏教とどう違ひかであり、それが、それまでの仏教というものは四千何百巻であり

ますか、非常に沢山ある。その中で法華経なら法華経が一番よいものだといふようなことを思い定めて、法華経を中心に宗旨を立てる。華嚴宗では華嚴経を中心、それから弘法大師の方であれば密教といふのでありますから、中心になるお経が大日経でありましょう。しかしみんな或る一つの御経を、これ一つが一番尊いお経だといふことを定めて、それを中心にして仏教の上の修行して行くといふのであります、法然上人のお態度といふものは、仏教の經典はどれもこれも立派なものである。然しながら自分の問題としてこれを受取るという、どのお経に説かれてあるようにも、とても自分にはなれない。自分は全く駄目であつて、ただお念仏の教え、それだけである。自分が絶対に駄目だといふことが分つて、それでこのお念仏の教ただ一つに生きる外はない。つまり今までの色々な宗旨の態度と全く違ひ、釈尊からこのかた大分の年月が経つておりますけれども、法然上人のような態度の方は、法然上人が始めてある。それまでに誰もそういう態度で仏教に向つた人はない。これが法然上人の専修念仏、念仏ただ一つとなつていらつしやる大事なことであります。

そうすると念仏ただ一つといふことをお説きになると、どうしてもそういうことを人に説き示しておかなければならなくなる、そこで自然に説法といふことにもなる。それ

が法然上人であります。

親鸞聖人の態度

ところが法然上人に対し親鸞聖人は全く違ふ。聖人は法然上人のお説きになつてゐる教をすべて受けて、そのままに頂いていく。そして上人の御教のままに自分というものをやめていく。そういう絶対に受け容れると申しますか、そのみ教を頂いていくばかりだというのが聖人でありまして、歎異抄に御覧頂くような親鸞聖人の態度でありまして、聖人は説法なさるといふようなことは絶対になかった。法然上人は、初めて念仏ただ一つといふようなことをお称えになつた関係もあつて説法なさらずにはいられなかった。親鸞聖人は法然上人の仰言る通りを身に受けて、それなりに動いていくといふのであつて、一つも説法といふようなことをなさらなかった。それが非常な違いである。お念仏に生きる、それは一つでありますけれども態度が違ふ。

親鸞聖人ほどに法然上人の教をそのままうけて一貫しておいでになつた方は外にない。そこが親鸞聖人の特色であり、親鸞聖人の本当に人をひきつける力はそこにある。自分ばかりの教を法然上人から頂いたよ。それをあなた方に聞かせてあげます。そういうことはチツともなかった。親鸞聖人が関東にお移りになつて常陸の国で二十年間もおいでになつたようでありますが、その間にアチラ、コチラ

だから親鸞聖人という方は非常な特色を持ったお方であつて、その特色は今のようなことであると、こういうことなのであります。

第三章の問題

この頃外国語大学の教授をなさつていられる増谷文雄という方が、『親鸞』という題で聖人の一代をお書きになつた書物もありますし、それから『日本人の仏教』という本を書いて出していられます。そういうものを読みまして、この増谷さんのお考えといふものを聞きまして、歎異抄の第三章について非常に私の心をひかれたのであります。

といふのは第一この第三章の終りに「と仰せそうらいき」とありますが、これは誰が仰せ候いきであるか。普通多くの方が解釈して、これは親鸞聖人が、これ／＼と仰せ候いきとホトンド皆の人がそういう解釈していられる。それが間違ひである。そうすると第一章から第九章までの間に親鸞聖人のおつしやつたお言葉を書きつけて残してゐる間に、「と仰せ候いき」といふ唯円房の言葉がこれだけ入つたといふことはおかしい、といふことを云われるのであります。「仰せ候いき」までが親鸞聖人のお言葉であつて、親鸞聖人が、こう仰せられたと、こう仰言る。それは法然上人の仰言つたことを親鸞聖人が、こう仰言る、とこう云われるのであります。

本堂？

で説法なさつたといふことはない。親鸞聖人伝を一生懸命生涯研究なさつた山田文昭といふ方のものを見てみますと、いふと、常陸の稲田で親鸞聖人は小さな御音堂といふようなところに七人か八人集つて、聖人が自分の心持はこんなです、この念仏をこういう風にうけておりますといふようなことを告白なさる、すると集つた人々も銘々自分の心持を云う。親鸞聖人の方では、こういうことを言うて人を説法してやれといふようなことは微塵もなかった。つまり高い壇の上にゐがつて仏法の説法をやるといふようなことは絶対になさらなかった。

聖人の魅力

ところがそういう風なことをやつていらつしやる間に二十年経つ間には段々と親鸞聖人の御心持に同じようになる、そういう御同行達が段々と出来てきたのである。そのところが親鸞聖人の何ともいへぬ魅力であると、こういうことをいふのであります。

成る程、私も長い間親鸞聖人のお書きになつたものをすこしづつ頂いて居りますが、実際その通りなのであります。聖人が私をひきつけて下さるのは、お前にこういうことを説いてやるぞといふことは一遍も仰言らないで、自分はこういう風、こういう風の味わいを身につけてゐるということを仰言る、それがしみじみと私の心にしみこんで行く。

そうでありましょう。「と仰せ候いき」といふのが筆者唯円房の、何かの言葉としてそこに入つてゐるのはおかしい。と申しますのは、私、近角先生からお育てをうけましたことは何時も申します通りであります。近角先生が、歎異抄の終りに出ている大切な証文といふのは何であろうかといふようなことを問題となさいまして、その大切な証文といふものは歎異抄以外にあるのじやない。この親鸞聖人のお言葉を直接書いた、それが大切な証文である、とこう仰言つたものでありますから、第三章の「と仰せ候いき」まで親鸞聖人のお言葉であると解釈しないと変なことになると、こうなるのであります。

善人悪人の問題

それじゃ、そうかも知れないけれども、それじゃ「善人なおもて往生とぐいわんや悪人をや」これは法然上人は、この反対のことを仰言つたそうではないか。悪人でも往生する、まして善人をやといふようなことを仰言つたでないか。こういう問題がここにあるといふのであります。ところが、法然上人は成程そういうことを仰言つたと伝えられてあるが、法然上人の本当のお心持は、歎異抄の三章のお言葉の通りのお心持であるといふのは、歎異抄より余程前に、法然上人の直弟子勢観房源智といふ人が書かれたことであるから、それが間違ひがないとせねばならぬ。そ

うすると法然上人の本当のお心持は、善人なおもて往生と
ぐいわんや悪人をや、という心持であるが、これは余程誤
解され易いことであるから一般には法然上人はその反対の
ようなことを仰言つたのである、と段々なつて来ているよ
うであります。他の資料でもそういうことが証明されてい
るようであります。さつき花田さんにそういうことを申し
上げて、勢饒房が書かれたものを見せて頂いて見ますと、
矢張りこういうことが説かれてあります、「善人なおもて
往生とぐいわんや悪人をや、」そういうことになつており
ます。

言葉つかいの事

そういたしますというと、今の増谷さんの仰言ることで
ありますが、この歎異抄三章の言葉つかいというものが、
法然上人のお言葉使いに非常に以てている、或は法然上人の
お言葉がそのまま出ていると云つて居られます。これは私
では何とも言えないことであります。私は法然上人のものを
をそんなに読んで居りませんので私には分らぬと申し上げ
るより仕様がありませんが、増谷さんは色々なものをよく
しらべておいでになる方で、しかも真宗の人でなくて、真
宗以外の人であつて仏教のことを研究して述べておいでに
なる、そういう方であります。そうでありますから真宗の
信者達が感じていることよりも、もチツと違った感じを持

あればなお一層その子供のことを心配する。そういう普通
の親の心持から考えると、善人なおもて往生とぐいわんや
悪人をや、というお言葉はすぐ解る、そういう風に最初考
えて居りましたし、今もそういう考えは同じなのでありま
すが、ところがそれより、もう少し考えまして、ここをこん
なに考えておりましたのであります。法然上人の仰言つた
お言葉がその反対であるといひますと、「悪人なお往生
すいわんや善人をや」ということであつたとすれば、そう
すれば法然上人という方はお念仏の上で非常にすなおなお
方でありましたから、御自身の悪人であるということをし
みじみとお感じになつておられる。だから自分のこういう
悪人も弥陀の誓願の不思議におたすけをうる、まして自分
のようでない人々はお救いをうけることは必ず間違ひはな
い、とこういうことじやあるまいかと、それは法然上人と
親鸞聖人と結局同じだということを知らせられない前であ
ります。そして親鸞聖人について云うよりも私自身の心の
問題としてこの「善人なおもて……」というところを、こ
のようにうけていたのであります。

つむじまがりの考

私はいつも煩惱具足の者でありますということをよく申
しますけれども、そんなことを口には言いながら、心にど
こか未練なところがありまして、これでも何処か取りどこ

つていられるようであります。そうして法然上人のものを
読んで見る、そして第三章を読んで見ると、これが非常に
法然上人のものの言い方、それがそのまま出ているように
感ずる。「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因
なり、よて喜人なおもて往生とぐいわんや悪人をや」とい
うような言葉使いが法然上人式の言葉使いだとそういうこ
とを言つておられます。

そう云われますという成程さうであらうかと思ふよう
になりまして、今増谷さんが仰言ることを思いますという
と、親鸞聖人が法然上人の仰言つたことをほとんどそのま
まに覚えておいでになつていて、法然上人が、こう仰せ候
いき、とこう仰言つたのだらうかとこうなつてまいります。
それで、これはまあ法然上人のものをよく読んでいらつし
やるお方があればこれをよく考えて頂きたいと思ふのであ
ります。

私の最初の考

それから今度は私の問題でありますが、私はこの第三章
の一番はじめのお言葉を読んで、第一に考えましたことは
これは普通の親が自分の子供等に対する心持、それから考
えるときすぐ解るように思う。親というものは自分の子供が
出来て、その子供が善くても非常にその子供のことを心配
する。ましてその子供が非行少年だったりして悪いことが

ろのある人間だ、全然悪いというんじやない。成程悪いこ
とは悪いけれど、何処かに自分はこれでも取りどころがあ
るんだということがそこにつきまつてまいります。そ
れだからこの「善人なおもて往生とぐいわんや悪人をや」
というところを、どうしても自分は悪い／＼と云いながら
どこかに善いところがあるんだというような、そんな負け
惜しみのような心持の仲々なおらぬところの者、そんな
者でも往生を遂ぐ、いわんや、その法然上人のように極く
すなおに自分の徹頭徹尾悪いと感じておいでになる方はな
おさら往生を遂げ給うのであると、こういう風にそこを大
分もじつた解釈になりますけれども、私自身が實際この煩
悩熾盛の者じやとか、悪い奴じやとか始終申しますけれど
も何処かに未練の心があるものでありますから、だからこ
こをそういう風に解釈していたということを申上げるので
あります。こういうことを前に「慈光」に出して頂いたこ
ともあります。これはどんなものかな、といわれたことも
あるのであります。じやから私自身が余ッ程つむじ曲りの
性質からここをそんな風にとつておりましたと、今告白申
し上げるのであります。

然し今増谷さんが仰言るように、法然上人も親鸞聖人も
両方共にこの通りだとなつてきますと、これを極く素
直に受けとるということが本当じやありませんかというよ

うなことを思いますのであります。一つ問題としてお考え
頂きたいのであります。

煩惱の問題

一人に向つて、私は悪い奴であります、私は濁悪煩惱
の者であります、というようなことを云うことが大分臭い
と思うのであります。親鸞聖人は何人も人に向つてそんなこ
とを言うというお方じやなかったのであります、法然上
人のみ教を素直にうけて微塵もそこに違わぬというよう
なことで一生涯やつてこられて、法然上人に非常に感謝し
ておられるところが、親鸞聖人の徹底的にいいところ、徹
底的に私共をひきつけて下さるところがそこにあります。

ところが私共はしきりに煩惱具足の凡夫、火宅無常の世
界というところを頂いてすぐそれを人に見せびらかすよう
な、人に披露するような積りで、自分は煩惱具足の人間で
あります、悪人でありますというようなことを云っている
そこに非常に不純なことがあると、私自身感じるところで
あります。

実際私自身は、そんなことを云つても何処か取りどころ
があるというような変なところがつきまとい居りますか
ら云うことがうそになるのであります。

まあそんなことを種々考え合わせましてこの三章を頂き
ますのであります。それで前からこのおしまいの方の

「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」、
そこは私に大分ひびいているのであります。悪人とは、悪

人と自分を認めるのじゃない、他力をたのみ奉る悪人で弥
陀の光明に照されるというと、自分は悪人と思いたくない
けれども結局どうしても自分は悪人だということになる、
それなのに自分は何処かによいところがあるとそういうこ
とを思うから、それじやからその点他力の弥陀のおひかり
に徹底的に照らされていけないのじやないか。徹底的に照ら
されるならば、この「他力をたのみたてまつる悪人もとも
往生の正因なり」とそこがそのまま受取れるのじやないか。
そこが大無量寿教の悲化段（けだん）から五悪段、ことに五悪段につ
いて私自身の悪いところを反省するということのようなじや
あなくて、私はむしろよいところがあると思つてゐる。その
私に対して、お前は、お前自身には分っていないだろうけ
れども、かよう／＼の悪いところがある、と仏様が仰言つ
て下さる。そしてその仏様は自分を大いに攻撃しておられ
ると思つて仏様のお顔をフト仰ぎますというと、仏様の目
に一杯涙がたまっている。そういうことであります、お
前自身に自覚していないであろうが、かよう／＼の悪いと
ころがあると、しみじみと涙をもつて私に云つて下さる。

仏光照曜

私自身が五悪段に述べられてあるようなことを自分で反

づいた信仰が何の力になるか。私の上にそがせたまう、
やるせない仏様の血の涙、その血の涙の私に通うことによ
つて始めて私をして私たらしめていただくことが出来るの
だ。ほんとうに血が大切な。

（昭九・一〇月）

省は仲々しませんものでありまして、その自分でも分らず
におりますところの悪いところを、仏光照曜であります、
仏様のおひかりが照らしとおして下さって何とも云えない
ということになってくる。そのところが他力をたのみた
てまつる悪人もとも往生の正因なり、とこう仰言つて下さ
るところじやありませんかという感じを持ちますこと
であります。それで色々のことを考えはいたしますが、こ
こまできかすと、ああなるほどという感じにうたれますの
であります。一応のことを申し上げますれば、そういうこと
であります、一寸休みます。

不問語

清水 凡 禿

去る日馬の市に行つて見た。沢山の馬が取引された。一
頭毎に値がせられて行く。私のような素人から見て意外な
感じがする事が多かった。それは骨格の良い大きな立派な
馬でも値がやすく、それほど思われぬ馬が途方もない値
で売られていく。段々皆の話を聞いたら、主因は血統にあ
ることを聞かされた。ほんとうに血が大切な。

これが信仰だ、こうなつたから信仰を得たのだと頭でき

或るお方が私の家に飛びこんで来て、仏教のお話を聴か
して下さいと申されたので、仏教のお話を申すこともよろ
しゅう御座いますが、一体何の目的で仏教の教えが生れた
のかそのことを明瞭にせずに、仏様のお話をきく人が多い。
先ず肝心なのは仏教で掲げている看板をよく見てお話を
聞くことだ。酒屋の看板を見ずにヒョイと店に飛込んで、
お団子を呉れと云うたとて満たされる筈がない。

それでは一体仏教の看板は何であるか、それは唯一つ転
迷開悟につきる。ややもすれば人格の完成、家庭の平和、
世間の信用、お金が貯まるように、身体が丈夫になるように
等の目的で仏様のみ教を聞く人が多い。したがつてその要
求をみたされる筈がない、よく／＼看板を見るのが大事だ
と申しましたら非常に喜ばれてがつしりと私の話を聞いて
下さつた。

（昭一一・六月 法悦抄より）

人間のいとなみ

池山寿夫

私は只今御紹介いただきましたように、池山榮吉の長男でございます。からだも、顔も、声も大変よく似ているそうで、ソツクリだそうであります。もっとも心は父とは似てもつかないような子供でございます。

花田さんからお話があつて、憶面もなくこういう席に出て何か声を出す次第でありますけれど、勿論その資格もない、その柄でもない、性来のオツチヨコチヨイで、お依頼をうけて、え、ようございます、と例の通り受け合ひをしまして、後で考えて、申しわけないことをしたと慚愧にたえなかつた。けれどもそこで思ひました。花田さんは何も彼も御承知の上で、私に何か話せと仰言る。沢庵は切りよるだろし、或は羊羹にみえるかもわからん。けれども花田さんは私に羊羹になつて来いと仰言つたのじやない、沢庵は沢庵のままで来いところ仰言つたのだらう。沢庵でいいのだ、何も玉子焼や羊羹の顔をして出るには及ばないん

が許されませんで、又南米へ帰つたのであります。

その時に父も私も笑つて別れたのですが、心の内では、もう今生ではお会い出来ませんね、今度お会いする時は違ふところですね、という気持は十分持つて別れました。それから半年経つて、南米で電報を受け取つたんですが、その時は、ああとうとう来たか、マア然し半年一緒に暮したからいいわ位のつもりで居りました。父は、どのくらい私に会いたがつていたんだらうか、どの位淋しく思つていたんだらうか、などということ余り考えもしなかつた。今わかるんです。

私は三人の子供の父ですが今私が死んで、子供達が外国にいて、そして生別の時を迎えることになつたとすると、どんな気持になるだらうか、父は矢張り淋しかつたんだらうと思います。その時はわからなかつたことが今になつて少しは解るのです。

人生には色々なことがあると思いますが、何も彼も解つた積りで暮していたら大間違ひです。私は何も彼も気が付いていてと思つて暮してると大間違ひだと思います。

六十六年、よく生きて来たものだと思ふんです。結婚後のことを云えば、二人の夫婦が始まつて、途中でゴジャゴジャふえて、そのゴジャ／＼が巢立つて、そしてまたもとの二人に遷る。二人に始つて二人にかえる。もつとも始め

だ、同じ道で、おなじお慈光の下で生きさせて頂いている我々じゃないか。その中の一人の私として皆様の前で私の思つていることをザツクバランに話すことが、何が恥しいんだ、こう思ひましてノコノコと出て来たのであります。色々のお方がここでお話があるでありましょう、それを皆様は前々からお聞きのことでありましょうが、どうぞ今日はそういうお話をお聞き下さるおつもりは捨てて下さいまして、時には沢庵も噛んでみようというお氣持で一つこれからのくだらない話をきいて頂きたいと思ひます。

私も今月でまる六十六年を迎えます。私は父が二十八の時の子で今年は父の二十八回忌、とすると丁度今年は父が死んだ年になります。

父が亡くなりました時は、私は南米に居りました。その亡くなる前、半年ばかり内地へ帰つて来まして父と一緒に暮して、仕事の都合でどうしてもそれ以上日本に居ること

の二人は若くて綺麗なんです、二度目の二人は両方共白髪で鍛だらけになつて居る。これは仕方がありませんが、兎に角二人に始つて二人に遷る。これは人間の結婚生活の最も仕合せな姿だらうと私は思ふんです。父にはそれもなかつたということ今になつて思ふのです。

まあ私も六十六年の間色々いとなみを續けて来たんですが、振り返つてみますと過去の六十六年があつたんだか無かつたんだかわけが分らない。一瞬にして過ぎ去つたやうなもので、ただ怒つたり、笑つたり、泣いたり、よろこんだりして来たことだけが人間のいとなみであつたやうにも考えられます。

四五日前のことですが、ペルーから来た二世の人が二人わぎ／＼私を訪ねてくれました。これは日本外務省が第二世中の指導者として南米三ヶ国から日本視察に招待した九名中の二人ですが、私がペルーにいました時分にまだ二十才位の青年でした。別れて二十三年振りにワザ／＼名古屋へ来て私の宅に寄つてくれました。会つて見ると成程立派な壮年紳士になつて居るが、その間二十三年があつたんだか無かつたんだかわかりません。昨日まで会つていたのと同じ具合です。

そうしますと私共は時の流れというものについて、長い間とかホシの瞬間とか云いますけれども、そうした差別が

あるんだか、無いんだかわからないような氣持にさえ打たれたことございます。

しかし所謂、業縁、業という大きな流れの中に一瞬うけた自分のささやかな一生というものは、ささやかではあるが、何という大きなものだろうということも時々考えるんです。

長いのか、短いのか、大きいのか、小さいのか、そういうことを考えますと、何だか大きな部屋の中で本当に一人であるような氣になるんですね。恐ろしいと云うんじゃない、尊い^{まじか}と云うんじゃない、淋しいと云うのでもない。何だか大きなガラシとした部屋の中でじつと一人居る、時々胸を張っても見るが、またうずくまりたくなる。人間誰しもそうであるだろうと思ふんです。だけれど、何時もそんな氣持で暮しているかと云うと、勿論そうじゃありません。

が要するに自分で振返って見て感服れるというような足跡は一つもなかつたという氣になります。そうすると自分というものを振返って淋しくならざるを得ない。よく自己の確立とか、自立とか云いますけれど、本当に自分の心につつ立つて自分の生活をいとなんで行くという瞬間は少いのじゃないかと思ふんです。少くとも私はそうでありました。

か。やりたいことをやつていいんじゃないかという。これは地面を匍^はいずる歩みで、言い換えれば、動物と同じ歩みである。私の六十六年の間を振返って見ると何とその比率も多かつたことかと云うことを考えます。

更に、こうやつたらいいんだとか、考えたつて仕様がなにかということ自体をさえ考えないでやつたことがどのくらい多かつたか。それで生き、それで暮した時間がどのくらい多かつたか——自分に対して、人に対して——ということを考える。

夢遊病者でもなく、動物並みでもなく、人間が人間としてのいとなみの本体はどこにあるのだろう。人間と犬猫とすこし違ふところがあるとすれば、否あろうとするならば、矢張りこうすべきであると云うことを考え、その時夢遊病者にならないで、或はそういうものはいらないと捨てちゃって地面を匍^はいずり廻ることだけの動物にならないで、いや匍^はいずり廻っている、夢遊病者になっている、ということを知っている生物になる。唯それだけの違いじゃないかと思ふんです。それが人として望ましい姿、あるべき姿じゃないかと考えます。自分が始終そうであると云うんじゃないやありませんよ。時々ある一瞬、かかる姿にもどらせて頂けることもある、ということを考えるんです。

ところで自分のことを申し上げるわけがありますが、そ

人間こうすべきである、こうせねばいけないのである、こうすべきである、ああすべきである、すべきであるということをお願い、それを人に話し、それを並べたてることによつて、自分は恰もそうしているように錯覚をおこすことがある。私が子供なら子供に「学生は学生の本分に基^{もと}にしてしつかりしなけりやいけないんだよ」と云っている時には、自分はそうしてきたように、自分はそれが出来るような氣になつて居る。「あゝしとかねばいけないよ、こうしとかねばいけないよ、いけないよ。／＼」ばつかしを並べて、そうする氣持になつて居る。それは夢遊病者の状態になつて居る人間の歩みであります。

べきである、“Ought to be”これはいくらでも考えられる。いくらでも言える。そう思つて、そう話して、自分はそうして居るような積りで居る。これは夢遊病者の状態、何と度々、何という長い間、自分は夢遊病者の歩みを続けたことであろう。六十六年の間にその比率をとりますと、夢遊病者であつた時間の何と長かつたんだろうということを考えます。

また一方から云うと、いくらべきである／＼とならばたつて、人間には出来ないものである。出来ないのが人間じゃないか。それなら、そんなことを考えたり、ならべたりすることはつまらぬじゃないか、考えるには及ばぬではない

う思つた時に矢張りそこにすぐ落とし穴が出来ます。逃げ場所が出来ます。『だけどあいつも同じじゃないか、人間誰しも同じじゃないか、俺だけそれを苦にするに及ばんじゃないか』と、他との比較に逃げてしまふ。或は相殺^{あひころ}の世界に逃げこむ。相殺というのは経済上の言葉で、お前にこれだけ貸しがある、俺はこれだけ借りて居る。両方これでパーパーだと、金の事ならそれで済むんですけれど、人間の生きゆく人のいとなみで相殺の形で逃げるそれは解決にはなりません。例えば夫妻でも同じことです。俺はこうやつたがこれは少し俺が間違つていたかもしれないが、お前も間違つて居るじゃないかね、だからこれでパーパーだと。これが相殺の世界ですが、比較の落とし穴や相殺の逃げ場にかくれるところに自分のいとなみの確立ということは無いのであります。

父はよく不当^{ふたう}爲の悪という言葉を私に話したことがあります。それは爲すべき事を為さないのも悪だということです。私は何も悪いことをしないと私は女房に思つて居ます。友達にも思つて居るかも知れない、世の中へ対しても思つて居るかも知れない。じゃあ爲すべきことを爲したか、お前は爲すべきことをスツカリ爲したのか。知つてて爲ないことすらあるではないか、まして知らないで爲なかつたことがどの位沢山あるかも知れません。人間一人々々が皆そう

いう立場にあると思うんです。この意味で私は何も悪い事を為さないよと云い得る人が一人でもあるだろうか。為すべきことを為さないのは、その反対、自分では気付かないが、どんな悪いことをしているか分からないという事にもなります。重点は自分が気がつくつかつかないかじやないと思うんです。人間のいとなみに於いては、人間の気の付かないところに重点がある、という事をしみて、と思います。

私は終戦後、高知へ行つたんですが、高知で十六年ばかり暮らしまして、三年前に名古屋に出て来たんです。高知に在る間は、半分は山の中の一軒家で暮したんです。終戦直後の話なんですが、高知市へ出るまでに電車で十五里の道を行かねばならない。或夜、終電車に乗つて帰つて来ました。すいていました。少し離れた席に若いお母さんが二人の子供を連れて乗つておりました。当時一粒のキラメルがどんなに尊かつたかを皆様お忘れになつてはいないだろう。そのお母さんが子供にキラメルをやつてゐる、尊い貴重物ですネ。ハンドバッグの中から出して電車の中でとでもうれしそうに食べていました。お母さんもうれしそうに見ていました。美しい姿だなあと思いました。ところで私は前ばかり見ていて隣に気付かなかつたが、そこにはやはり別のお母さんが子供に、「アレ見て御覧、牛がいるよ」と真暗だから何も見えりやあしないんだけれど一生懸命に

子供の心を窓の外にそらすように、かばうようにしている。その当時の子供は甘い物を欲しがつてガツ／＼してゐたんだから、それをやれないお母さんはそれを自分の子に見せまいと思つてかばつてゐる。美しい姿が、大きなよこびが、片方で苦しみを与へ嘘を生ましている。これが人の世の中なんです。

自分一人で考えて俺のやつたことは一から十まで俺が知つてゐる。あのことは悪かつた、このことはよかつた。あれは俺の足跡だ、これは俺の功績だ、これが俺の……などと並べてもそれは本当に大きな中の一つの小さな塵を拾い上げ、自分勝手に解釈評価したもので、自分の気のつかぬことがどれだけあるかと思ひますと、私自身考えてみまして、自分が子として何と到らぬ子であつたことか、親として何と到らない親であつたろうか、夫としても、或は友人としても何と底の浅いものであつたろうかと思ふ心が浮かんて来るのです。

さて、では人間はそうした中途半端な生活を打ち切れるかというところに問題があると思ひます。人間は愛という言葉もよく使うし、幸せという言葉もよく使うが、人間のいとなみの中にどれ程深い愛が持たれ得るのでしょうか。いくら子供を愛していると私は云ひましても、又愛してゐる積りでございますが、子供が二度三度、五度六度と云うこ

とをきかなかつたり、自分の意志に反することをしたら愛し続けられるだろうか。若い男女が愛してますと云つて手を組んで歩いているが、お前はすいぶんきたないね、おかめだね、と面と向つて云つたら、女は矢張り愛し続けることが出来るであらうか。あなたもつとお金があつたらいいのに、と云われたら男はそれでも女を愛し続けることが出来るであらうか。綺麗な着物を着合つてゐるからお互に綺麗だねと云い合つてゐるが、裸になつて穢い肉体を出し合つたら、アゝあいつ穢いなと、向うも、あいつはきたないなとなるのじゃないかしら。

そういうことは分るんだが、それなら人間にそれを捨てて、もつとはかなくない、淋しくないところへ自分で行くか、というところに問題があると思うんです。

不完全燃焼の生活ということをおは思ふんであります。つまり座敷が汚れてゐると、紙屑がある、拾えといへば拾います。あそこに芥がある、掃き出さなけりや穢いぞと思ひます。散らかつてゐる、片付けましょうと誰しも思ふんです。座敷のそうしたことはわかりますが、私達のいとなみの中に如何にそれと同じ芥や、反古が残つてゐることだろうと思ふんです。

さつき云いましたように、比較とか相殺で片付けた場合、それは完全燃焼しないで目に見えない残骸として人生

の座敷にあるんです。あれあいつが悪いんだとこつちが思ふ、いやあいつが悪いんだと相手か思ふ。それでバーになつたように思ふんだけれど、実は処分されないままに事象が残る。あゝあきらめましたよ、と云う。然しそれによつてその事象が無くなつてはいない。

人間の生活には不完全燃焼の芥が沢山残つてゐる、その中で暮している。じやその芥を自分の力で、座敷の反古を集めるのと同じように生活のそういう反古を払いのけることが出来るのか。人生の不完全燃焼、それが自分でどうにかなるか。

それを何とも思わぬのならそれでいいかも知れぬ。でもそれが嫌だなあ、淋しいなあと思ふ時に、じやどうにかお前の力で出来るかというに、そこに問題がある。

こういう事実があります。これも矢張り終戦後間もない十年ばかり前にその経験者から聞いた話です。或家庭、しつかりした暮し、中流以上の家庭でお父さんも社会的責任ある地位についておられる人です。その息子さんが高等学校の時に所謂ぐれて金と時計を奪つた。それで警察にあげられた。ところがいくら警官が云つても頑として口をきかない。平然としていてどうやつても駄目。そのうち親の名だけはわかつた。それが責任ある社会的地位を持つてゐるお父さんだつた。警察の呼び出しを受けてお父さんが出

頭すると、息子もその前に連れ出された。居合せた警官も何かお父さんがさとするかと思うていたのでありますが、又事実お父さんもその積りだったんだそうですが、だが連れ出されて来た息子を見ると、お父さんは立ち上つて、息子の手をとつて、

「どうだ、お前、寒くはないか」

としか云えなかつたんだそうです。

冬だったんですが、唯一言葉かないかときいたんです。そしたらそれまで誰が何と云おうが、かんと云おうが、傲然としていた息子が、うつむいて、バラツバラツと涙をこぼして、それから警官の調べに対してスラスラと話をしました。この話を私は聞きまして、

「そうだな、偉いお父さんだな、そのようにしないといかん」

と思いました。ところがこれはとんでもない、自分としては思いあがりだったと気がきました。ああ云う話を聞きますと、成程そうだと、お父さんの方に重点をおいて自分もそう云う風にしなくちやいかなと思ひ勝ちです。が我々としては、子供の立場をしつかりここで受け取りたいと私は気付かして貰います。

子の立場、今云つたような人間のいとなみを続けている我々に対して、「どうだ！淋しいか」と云つて下さる

み親があるんです。「お前寒くはないか、寒いだろう、淋しいだろう」と云つて下さるみ親があるのです。我々は親の立場じゃない、子の立場です。不良になって、与太者になって、人を感^{あは}した子供の立場が我々の立場なのです。

そのお父さんが云つたそうです。「それはどうも、親としてこんなことをした子供に向つて、いきなり、あんなことを云う親は無い、甘いから不良になったと警官の方からも云われた。けれども俺はああ云わざるを得なかつたんだ。世の中が、新聞も、ラジオも、警察も、みな悉くが責めている、又責められても当然である、その俺の子供が前に出されて来た時、自分の口からは寒いだろう、つらいだろうという言葉が自然に吐き出されてしまつたんだ」こう父親が云つたそうです。

私達のみ親もきつとそうだと思う。私達のぐるりにはさつきの話のように、人間はこうすべきなんだ、人はこうあるべきなんだという教を説く人はワンサとあるけれども、それが出来ないで、やつたつてうわつたらで、本心からその気持を出し得ない私に対して、「お前は出来ないね、可哀そうだね」と云つて下さる方が何処にあるう、阿弥陀仏より外は無いんであります。

これを心に頂いて始めて人間の幸せというものがそこに汲み取れるんじゃないか。人間のいとなみがはかないまま

に、いとなみが穢^{けが}れままに、そこに永遠のよろこびも幸せも掴^{つか}み得るんじゃないか、と思うのであります。

次元ということがあります。或る次元で考える、それを違った次元で考えるとまた違ったものが出てくる。物はあるが、それに対応する次元の差がある。阿弥陀仏のお慈悲に抱かれた時に、我々の心は阿弥陀仏に抱きとられて違う次元へ移して下さる。すると違ったものが味わえて来るのじゃないか。

浅きがままに、少しでも人を愛し得ることのうれしさよ、有難さよ、とこういう気持は「お前が可哀想なんだよ、寒くはないか、苦しくはないか」と云つて下さる親様の気持がとどいた心に始めて本当の味わいが出るんじゃないか、いかと私はこう思うんです。

先程言つた不完全燃焼の人生の反古、紙屑、それもその次元に抱かれた気持で見た時にメラメラと燃えあがつて無くなってしまうことがある。その焰がお念仏じゃないかと私は思うのです。穢い人間が違った次元に移されて、穢い人間が、つまり自分が、いとなんでいるはかないことを見た時にメラメラと燃え上る焰がお念仏じゃないかと、こういう風に私考えるんであります。

さき程申しました広い部屋の中で独りであるというよう

な心境にもなりますが、その時に、「そのお前は一人じゃないんだよ」という声が部屋の何処からかひびく、すると一人じゃないといううれしい気持にもなるのです。

歎異鈔に「わろからんにつけてもいよく願力を仰ぎまいるとある。柔和忍辱の心だけじゃない。いろんなことが自然のことわりにて出てくる。よく人間は感謝しなくちやいかんと説く人がある。そういう教がある。その通りです。だけれど、感謝というものは、感謝しようと思つて出来るものじゃない。感謝は結果です。感謝する心は結果です。何かがあつて、それが自然に感謝する心になつて出てくる。妻に感謝する心、子に感謝する心、隣人に感謝する心、世の中に感謝する心。感謝しなけりやなりませんから感謝しましょうと云つたつて出来るもんじやない。自分というものを抱いて下さる大なる慈悲というもののの中に抱かれて見た時に、有難いな、という気持が、自然のことわりにて柔和忍辱の心もいでくべし、という結果になるんです。必ず出てくると云うんでもない、出て来ねば間違いと云うんでもない。そんなことを言われたら、とつつけな

い。自然のことわりにていい、又いでくべしということが実に有難いのです。

自然のことわり、つまりそこに次元の違ったみ親のふと

ころに時々帰らして頂いて、そうして自分の生活を見ることによつて、さき程来お話いたしました人間のいとなみが、人間のいとなみであるまんに、そこにこもつてゐる大きな重さを自分で感得することが出来るんじゃないかと思ふんであります。

さつき云いましたように、永遠からグーと来て、又永遠にグーと流れる一つのポイント、そのポイントの中に含まれてゐる重さ、尊さといひますか、そういうものを頂かしていただける。ことごとくこれ自然のことわりである、大いなるみ親の働きであると、こういう風に味おうてゐるのであります。

唯信鈔の「今生夢のうちの契り^{ちぎ}をしるべとして来世さとのまえの縁^{えん}を結ばんとなり云々」あの言葉でも、これを味わわして頂けるのであります。あれは夫婦のあるべき姿のみ教ですが、あえて夫婦には限らないと思う。今生夢のうちの契り、今生夢のうちの色々な出来事、それをしるべとして、来世さとの前のえにし、つまり永遠性の意義、それを掴まして頂く。何によつて掴まして頂くか、自分の力で掴むんじゃない、お慈悲を感得することによつて、次元をかえさして頂くことによつて、その意義が自然に掴まれる。

この次元から掴んだ幸せが本当の幸せだろうと思う。何

に感謝する心や、すこしでも愛する心でも出ることがあれば、その人程幸せは無いと思ふんです。

こんなことを話しまして、私はあの、

「是非知らず、邪正もわかぬこの身にて

小慈小慈もなければ、

名利に人師このむなり」

の和讃がありますね、あれが心に浮んでまいります。偉そうなことを云つて、名利に人師このむなり、こんな気持ちが今の心の隅に無いわけじゃない、ある。お恥しいことです。

父は笑つてゐることでしょう。父はお茶が好きでしたから、今夜はひとつ父と一緒にゆつくりお茶を飲んでよい晩を過そうと思つております。父が、今日のお前の話が仲々よかつたと云うてくれるか、もうあんな話をするんじゃないよと私を叱るか、これは今夜になつて見ないとわからないと思ひます。

甚だ勝手な、出鱈目な話でありましたけれど、私の心には嘘はまあ云わなかつた積りであります。皆様だからこそ聞いて頂いて話をさせて頂けたわけであります。どうぞお許しの程を、どうも有難うございました。

昭和四十年十月三日

一 道庵にて

故かなれば人間の幸せというものは薄つぺらなものだといふことを知つて、しかもああ幸せだなと思ふんですから。現世利益といふことが、御和讃にもありますが、然し、現世利益というものは思ふべきものでないと云いますが、實際その通りだと思ひますが、またこれほど大きい現世利益はないとも思ひます。

このはかりなき人生を、この一日一日を生きさして頂く、有難うございましたと、不完全燃焼の反古が燃える。全部じやなくても気のついた時に燃える、ああ有難いな、嬉しいな。親となり子となる縁は尊い、何億人いる中で過去の遠い縁によつてお前と結ばれた、嬉しいな、と、大きなよろこびを感得して生きる、これ程大きな現世利益はないと思ふ。

私は私の六十六年の間にどの位私に大きな現世利益をいただいたことかわからないと思ふんです。なんとも云えぬ問題にぶつつかつた時に、ああ有難いな、と思わして頂いたことがある、何度もある。父に感謝する心が自然にわいてくる。私みたようなものに注がれる慈悲、お慈悲といふものを感得することによつて、幸せといふものを見出すことが出来る。

自分が愛されるというよな、ボタ餅を貰つたようなことだけが幸せじやない。愛されるんじゃない、少しでも人

母

築紫野春草

うぐいすが鳴くよと縁にひざまづき念仏なさす母は今は亡き

「法を聞け」と愚鈍のわれに薦は告ぐよと母のよろこばしたる

母の亡き後の十年にすさまじく変りはてたり世間もわれも

うぐいすの来鳴かばかけて告げまくとわがたのしみを告げむ母なし

内も外も耐え難き世となりたれば亡き母思ひ耐へ居り我は

よく耐へて生きませしかなたらちねの母が一生の八十年を

田舎寺の貧苦の底を極めませし母を思へば涙ながるる
一人生きて一人ゆくみちのさびしさを空曠無人とのたまふや善導

(歌集「雲霧」より)

一道会の記

榊 原 徳 草

本年の一道会は昨年二十七回忌を記念してから最初の会であって、何かしらどっしりと大地を踏まえた第一年目の一道会というような感を抱かされていたのであった。いつもならばその準備も方丈の仏前を中心にして四方八方に心も動き身体も働いたものだが、去年は早々の感をまぬがれなかったが、今年は境内の一角を淨域と化した名号碑が中心となって色々と準備を進めてきた。屋内よりも大地の名号碑から何もかも始まってくる。しっかりと膚についた名号から事が始まってくる。そういった新しく深く金剛台座を大地とした堂々としたお念仏の会座が今年から始まるという、或る意味では先師を追憶する今迄の会と違って、ここに再び先師が真のお姿を南無阿弥陀仏と顕現して現実となつて下さった感が深かったのであった。

そんな一種の感慨をもって私ながらに大いに期する所があつて準備をしたのであったが、私の勤務先の都合で三十一日開催と決定したので、毎年来会の松山大学の仏青の若

い人々の参会が不可能となり、松本先生ならびに松大仏青の学生諸君には誠に済まないことになってしまった。ここに若い今後を抱する人々に対して深くお詫び申上げる次第である。

なお今年の一道会には花田先生四大不調のため参会不能の連達が前日に配達され、又当日午前には先師御令息の池山寿夫先生が俄に会社の出張で参会できぬことになったとの電話があり、私としては期待の一道会がどうなることかと一時は悄然としたのであった。然し如何ともし難い事実はそのままに進める外なかった。加うるに小雨模様となつた秋の空はいよいよこの会を暗くしてきた。私の心は期待とは逆に途方に暮れた。

しかし、今は私の催しものではなかった。時の近づくにつれて見知らぬ人々の顔が見えてくる、旧知の人々がいる、三々五々と如来の御催しによって、わが計いの遙か彼方からの御計いによって、定刻には四、五十人の参会者に

よつて一道会は法爾として顕現したのであった。念仏の会是我執の固まりの私などが離脱してでっちあげられるものではない、ひとえに弥陀の催し一つで成立するものであると、又しても不可思議の德音に頭が下がるのであった。

白井先生が洋傘をさして名号碑の前へ参道を曲られる。井上さんが抱えるようにして従われる。雨中を名号碑の前に礼拝され、碑の裏側に廻つて「オネガヒダカラ、スゲキテオクレヨ」の所に暫し立つておられる。雨はひとしきり劇しい、その中を水溜りを除けながら玄関に着かれるのであった。

例年のように、私の導師で会衆一同と共にほんとうにみんなで阿弥陀経を誦誦する。続いて歎異抄十章までの拜誦もいつもの通り終つて、これから先師のお念仏によるお味わいや各自の日頃のお味わいを伺うことになった。その大要は次のようであつた。

(白井先生のお話)

今日は花田さんがみえず何かさびしい気がします、今日はどういふことが亡くなった方々のことが頻りに思い出されるのです。その人々の中に、私の亡くなった弟が、いまは最後の思出となりましたが、私に「兄さんの文章を読むと『ゆゑしき学生たち』とある歎異抄の文が思われてく

る」と言ったことがあります。私は「自照」誌に正信偈の領解をのべていますが、われながら強くそれを出しております。私の文は「自照」の読者を苦しめている。ただそういうものを通りぬけてお念仏一つが素直に頂ける境涯はまことに尊い境涯であると思つております。で、そういう境涯を、一ヶ月程前に亡くなった盛岡の友人二人の上に見てそれがしきりに思い出されるのであります。

一人は「慈光」に出ていた福田鉄雄さんで、私は気付かなかったが、私の弟の中学、高校の同級の友でありました。それが十八年も肺疾や心臓病で静養しておられ、それも知りつつ余り親しくお見舞の機会も無かったが、福田さんが教行信証を読みたいが、吾々素人にやさしく解らせて下さる本はどれがよいかわからせて下さいとたずねられました。私は求道心の厚い人があるなと思ひ、それから三、四回手紙の往復をしました。ところが花田さんから、福田さんは癌にかかれたとあつた。それから「慈光」にあの文が出たのです。福田さんは東京帝大の薬学部を卒業されて、岩手医大の薬局長を勤めておられたのです。今度初春頃から身体が調子が悪く、主治医の話を聞いているうちに、病氣は癌であると判つたのです。「あの文章を慈光に出したことは自分が癌の広告をしたようなものである」と言つていられました。「長く生きられないのち、いのちのある限

り一つには御礼をのべ、一つには大慈悲を共によるこびたいために手紙や文を書きたい」ともありました。そういう心に燃えたとおられてあの文を書かれ、そして亡くなって往かれました。それは自分の病氣は癌であると自覚して仏の大慈悲を皆さんに聞いて頂きたいという心に燃え立つての文であります。

福田さんが亡くなる十日程前に及川六郎さんも癌で亡くなられました。もう半世紀も前のことでありますが、親しかった先輩、斉藤自然氏などと願教寺（盛岡市）の夏期講習会―朝五時から七時まで、島地黙雷師や島地大等師の御法話をこの二人などと一緒に私は聞かせて頂いた、二人は私の開法の親しい仲間であつたのです。その時の斉藤さんの「聞く」という姿、願教寺の一室に五六人も泊りこんで真剣に聞いていられる、友達に議論する、先生に質問する。あれは四回目位の午後の座談会の時でした。斉藤さんは「私はこういう清らかな集りに参加して、清らかな心で法を聞く皆さんと一緒に聞いているので、友達から私も道徳的に清らかな者と思われているらしい。けれども胸に厭なもの一杯あとから／＼浮かんでくるのでたまらない、これをありのまゝ言えば島地先生も皆さんも愛想がつきてしまうだろう」と泣き出してしまわれました。

島地先生も、只一言でしたが「そういう浅ましいものを

られました。

福田さん、及川さん、共に私より十歳位も若いのです。若い人が先に往く、寂しい感じがあります。然しさびしくなればなるほど、浄土の往生というのを教えて下さった聖人が有難いのです。有難いみ教であると、いよ／＼知らしめられるのです。

私は此頃、二三日に一度は、この浄住寺の名号碑に参りましてね、「一心正念直来」のお言葉。「一心正念直来」の善導大師の語を、あのように読まれる池山先生どうしてあのように読まれたか、不思議でありましたが、「一心正念」は「汝」にかかってくる、善導大師の語では「汝が一心正念に、迷わずやってきなさい」となる、それを「汝」にしないで「仏様のお心に」読んでいて下さる心、初めは不思議に思えたのですが、名号碑に御参りしているうちに、聖人の御教は容易ならざる御教である、支那の祖師たちの心の奥底に流れてあることを、聖人ははっきりと言つて下さった。それをそのまま池山先生が伝えて下さって「オネガイダカラ スグキテオクレヨ」、迷わず直ぐ如来の浄土へ来ておくれよ、と仏の願いがしみじみと、仏の心が私などの心にしみとおってくる。それをあのようなふり仮名をつけて下さったことと思われま

す。昨年、あのお言葉を憶い出して話し得ずに終りました。

捨てないのが仏様である」と仰せになられました。その時斉藤さんが声をあげて泣いて念仏されました。

それからあせて求めていた人が非常に喜ばれたのであります。その人が及川さんで、岩手県水沢の出身で、小学校の先生をして居られましたが、私より若くして亡くなられました、感化は非常に深かった。斉藤自然氏から強い感化を受けられ、小学校長から退職後は教育委員として働かれました。

岩手県は私の故郷ですが、あそこは日教組が勢力が強く教育委員の及川さんは、県の教育方針と日教組の主張との板ばさみになつて苦しみました。ところが日教組の人々は無理をすると及川さんを失うから、及川さんをまもらねばならぬということになつて、及川さんへの信頼の念一つで、それで県と日教組の争いはスラ／＼と解けてしまわれました。これは念仏申す人の徳なんでありましょう。及川さんを通じて念仏の徳があらわれているのでしよう。

そういう人が今年の五月から黄疽となられ、十月頃には入院されて手術をせねばならなくなり、その頃の葉書には最後の覚悟をしている、とありました。そして亡くなられました。その奥さんや子供さんが御遺骨を大谷の御廟に納めにこられて私を訪ねられましたが、入院の間は非常に皆さんからほめられていられたと、子供さんまでが言ってお

た。今年、私は二月四日に卒倒しましてね、それから後の私の肉体の状態はそれ以前とは違つて来て居ると感じてきております。何時卒倒するか、ただこのいのちを持つて浄土往生のみ教えに会いまつたことを、非常に尊いことだつたということ、名号碑の前に立つて思うのです。名号碑に参詣する次手にあの参道を十回ほど往き来しますのです、私の健康を保つ道にもなつていて下さるのです。

長い話でまことにすみません。池山さんも見えられない人間というものは、この一道会に二三日前まで来ようとしてはたせないのです。それが人間の姿でありましょう。それに付けても、仏の証の世界で永遠に会えるという教、何か神秘的な妄想や夢でなくて、宇宙人生の真実になつた御教、因果の道理になつた御教、――然しそれを真理とか何とかいうので、弟が「ゆゑしき学生」と云うたのです。のだと、宇宙の奥底から湧き出してくる御念仏、死ぬときは死んで、永遠の生に入らせて頂くので、よくもこういう御教に遭わせて頂いたものであります。……この頃の味わい、感想であります。

宮地廓慧先生のお話は次のようでありました。

久振りでこの一道会に参らせて頂いて池山先生の御恩を

深く思うものであります。先達て川畑兄の御母堂が亡くなられて、その時蓮華谷の火葬場にお送りしました時、かつて私達一同がよく伺った池山先生の蓮華谷の御家、懐かしい思い出のお家の前を通り、在りし日のことどもを想い浮べ、集る私共へのあの慈眼あふるる御教化を思い出したのであります。幸寺兄はその近くに現在住んでいられますが承るところでは、御邸宅はいまは薬剤師の方が住んでおられるようですが、あの机も、あの部屋に元のままであるとのことです。

先生は或る時、今日は皆さんに市丸の歌を聞かせましようと言われて、直ぐ近所に住んでいられた御令息のお宅へ案内されて、ラジオから流れ出る市丸の歌う「天竜下ればしづきがかる、きせてやりたや、きせてやりたや、松傘」の小唄を聞かせて下さったことがあります。「きせてやりたや、きせてやりたや松傘」の所で、皆如来のお慈悲にむせびながらお念仏したことを思い出すのです。

只今の白井先生の「オネガイダカラ、スゲキテオクレ」のお話も、その席で承つたように覚えております。

たしか先生が住吉にお住みになつていた頃、カナリヤを飼つておられ、先生が廊下を往つたり来たりするとき、フト気づかれたことは、先生がカナリヤの籠の方へ近づくと頻りにカナリヤが先生を呼ぶのです。遠ざかると鳴きやむ

した。やうやくアメリカでも落着いた日に入らうとした八月の末でした。八月四日にビーバーが死んだとの知らせを受けました。小さい時に郷里から貰つてきて育てておつたのですが、出発の時に病氣にかかつていたので心に懸りながら旅立つたのですが、サンタバーバラに落着いて四日目に死んだのです。私は法名を書いて教会で読経してビーバーをしのびましたが、涙がこみあげてしようがない、可哀想でしようがない、泣いて一人でお念仏していました。

するとその時、婦人会の会長をしている方とその娘さんとが台所の方から入つて来られ、そして「先生、何を言っているのですか」という。私は日本に残してきた飼犬の死を知らせてきた話をしたのです。するとその方の家の愛犬も先年死んだのだと云つて娘さん——大学三年生ですが——共に涙を流しておられる。この娘さんは日系の三世で日曜学校のピアノを弾きに来て下さっている方です。母親は仏法をよく聴く方ですが、娘さんはまだ仏法をまだ理解していない。けれどもこの犬の死のことから大変親しくなり、この母娘とはそれから打ち解けて話し合うようになりました。私がこの六月に帰国するとき、母親はこの娘を連れて行つて私の母国を見物させてくれというのです。それで私は娘さんをあずかり共に帰国の途次、歐洲を廻り、印度の仏跡を参拝して日本に帰り、二ヶ月間この娘さんに日本の各

が、近づくともた呼ぶので、これは珍らしいことを発見したと思われて家族の人々を呼んで、同じように籠に近寄らせてもチツトモ鳴かない。先生が近づくともカナリヤは頻りに呼ぶように鳴くのです。そこで先生は言われました、「皆さん、カナリヤは私一人を呼んでいたのです」と。

「一心 正念 直来」如来は私一人をめがけて呼びかけていられる、と語られたことがありました、これは今なお私の胸に残っております。

善導大師が「真実心の中になすべし」と仰言つたのを、聖人は「真実心の中になし給うを用いよ」と読みかえていられますが、私もこれは聖人が如来の御心の中に深くはいられて、如来の本当の御心を聞かれてお読みになつたと頂いております。

私はこれを短冊に書いて先生から頂きました。先生はまたクヌギの若葉が太陽のひかりに向つてかすかな微動を続けているのを見出されて、人々が如来のお慈悲を感じるありさまに見られたお話もされました。

夏されば櫟若葉のなやかさ久遠女性のひらめきをみるという歌もそうした時のものであります。

カナリヤから思い出しますが、私は犬からですが、その犬の名はビーバーと云います。可愛がつて飼つていたのですが、昨年七月、私は米国へ留学のために日本を旅立ちま

所を案内して、先月四日に米国に送つたわけです。

私は思うのに、人間の心というのは、そういう所から通じあうということがあります。人間は最後には一つに通ずるものがあると思うのです。そこへ落着かねばならないところがある、「世々生々の父母兄弟なり」というようなそこへ一つになる、落着かねばならぬものがあり、御本願の力が世々生々の父母兄弟として、そこへ帰らせ最後の落着き場所となるうかと思うのです。その心を念じながら生活して頂く、そんなことを思うのであります。

池山先生は、生涯歎異鈔に打込まれたお方であります。私この一年程の間に思いますことは、歎異鈔第十三章の、「本願にほこる心」とあり、又「それは願にほこらるるに非ずや」とありますが、この「本願にほこる」の「に」であります。本願において、初めて自分の存在の意味を感じとる心、そう思うのであります。

「何れの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまいて」即ち私共、日常生活の相対人間と無限絶対とながる、これは御本願においてのみ可能であり、私共の生甲斐や存在の意味は御本願より外にないのであります。

信心よるこぶ人は「如来に等し」と云い、信心の人の心は「浄土に居す」と云う、この自信は御本願を場としてのみ言えるのであります。そういう面は聖人らしくないと云

われる人があるかもしれませんが、私達はここだと思う、「人倫の瞬言を恥じず」と仰せられる聖人の御心はここだと思ふのです。それにつけても善知識に遇う、池山先生にあわせて頂いたことを限りなく有難いことであると思ふのであります。

続く

『信仰静観録』抄

菅田 豊吉

無我執

或人はいう。自己保存は動物固有の本能で人間もこれを免ることは出来ない。吾人の言動、すべてその根本は、自己保存の本能から来る、と、

如何にも然り。されど吾人は自己保存だけで満足は出来ない。この自己は早晚死なねばならない。この自己は他の自己と衝突せざるを得ない。

吾人は我に執着するから苦悩が起り、罪惡を生ずる。熟々自己を反省すれば、われは実に罪惡の塊である。多少善事をしたようでもそれは皆表面のみである。内心に到れば利欲名利に充たされ、到底他人に打ち明けられぬことばかりである。

信仰に關しても又そうである。己れひとり信を獲たと誇

り、己れ仏のような心地して法を説き、道を教う、何たる高慢であろう。これに於いて人と和せず、人と争い、未信の人より劣りたる言行をなして怪まぬ。我は飽くまで罪惡深重の凡夫である。この凡夫を憐み助け給うが仏の慈悲であると感じて勇躍歡喜の思い胸に充ち溢れて仏のお慈悲を讃嘆渴仰する。かくありてこそ聞きたる人も始めて信を得るのである。

われ信を得たり、故にわれ他人を救済してやろうとの高慢心では到底他を感化することは出来ない。感化は人の力ではない、仏の力である。われ彼を感化しようと力むは、仏の力を盗んだのである。

われは深く自己を反省し、如何にも自分が我執深き罪惡の塊なることを感じ、かかるものをお助け下さる仏のお慈悲にて我執の氷塊を碎かれ融かされることが最も肝要である。





あとがき

極寒の二月であります、同時に春近しの感が随所に感じられるこの頃であります。

本号も記念号の続きといたしました。先ず真実院師の、御自身が生死巖頭に立たれて、御母堂に御自身の仏法の領解の至極を吐露されての「かたみの御文」を巻頭に頂きました。これは岡山県吉備町の西本清三様がお兄様の家の土蔵から見出されて特に御恵与下さったものであります。仏光照護のもとにあつての人間としての至極のまことごころにふれるものであります。

福島先生の御講話も、歎異抄の眼目である悪人正機直説である第三章を御身読下さったものであります。二回に分けて記載させて頂きます。

「人間のいとなみ」の池山寿夫様の御話は昨年一道会館でお願いしましたもの

で、記念号に頂き得てよこんで居ります。池山先生の亡くなられました御年を迎えられて、ことに感慨深いお話でありました。昨秋の京都の一道会には会社の急用で欠席せられましたが、この原稿で一道会のお述懐にかえて下さいますように。

「一道会の記」は、例年通り榊原徳草様の御労作によりまして頂きました。自然に年々に信香が薫り、信花の開くこの集い、御味読下さいますように。但し紙数の都合で二回に分けて連続させて頂きます。

○
 昨年は有縁の法友法姉を多く浄土にお送り申しました。又年賀状にも「喪中につき欠礼」との挨拶を多く受けました。

○
 弥陀たのめ弥陀たのめとて露も散るの一茶の句を思い浮べますと共に、我身の生死の一大事をおいのちにかけてのお教えと頂きます。

○
 鶯のこえを聞きつるあしたより春の心になりけるかな

良寛

御案内

※毎月第一、二、三日曜午後一時半。

一道会例会。

市電、新郊通り二丁目下車、東入ル二丁半

三本目辻左入ル。

国鉄、笠寺駅下車。

名鉄、呼続駅下車。

※毎月二十四日、午前、午后。

昭和区小桜町 教西寺法話会。

市電、御器所通り下車。桜花学園東。

定価 半年 二百円(送共)
 一年 四百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番